

2026年1月11日顕現後第1主日・主イエス洗礼の日

旧約聖書 イザヤ書42章1－9節

使徒書 使徒言行録10章34－38節

福音書 マタイによる福音書3章13－17節

本日は、顕現後第1主日、また、イエス洗礼の日でもあります。先週の火曜日、東方の博士たちの訪問を受けて、イエス様が救い主であることが顕現されて、すぐ洗礼というのもお話が飛びすぎではありますが、顕現節は、大斎節に向けて、イエス様のご生涯を短く学ぶ時でもあるからです。本日は、イエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けたことを改めて学びます。

さて、洗礼は、教会が起源ではありません。本日の使徒書で、ペトロが「**あなたがたは、ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事をご存じでしょう**」（使徒10:37）と語っている通り、洗礼者ヨハネが始めた行為であり、もともとはユダヤ教にある沐浴から発生したと考えられます。その沐浴に罪の許しの意味を付加したのが、洗礼者ヨハネです。

イエス様は、その洗礼をヨハネから受けました。これは教会にとって少し都合が悪い出来事です。地上的には自分たちの活動・集会の創始者であり、また信仰的には神の子、救い主、キリストである方が、罪の許しのための洗礼を受けたからです。しかし、教会は、その事柄を否定することなく、そこに大きな意味を見出しました。イエス様の洗礼とは、イエス様がまことの神の子、救い主、キリストであることの証であるからです。

マタイ福音書は、洗礼者ヨハネの登場について、マルコ福音書と同じく、イザヤ書40章3節から引用で、その預言の成就の出来事として伝えます。しかし、イエス様の洗礼については、そのようには伝えていません。そして、事実だけを述べているようなマルコ福音書の記述は異なり、マタイ福音書は「**ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。『私こそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、私のところに来られたのですか。』**しかし、イエスはお答えになった。『今はそうさせてもらいたい。すべてを正しく行うのは、我々にふさわしいことです。』そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした」（マタイ3:14-15）という会話を記述します。

その記述からわかることは、洗礼を受けるイエス様の方が、洗礼を授けるヨハネよりもすぐれていること、そしてイエス様が洗礼を受ける意味とは、「**すべてを正しく行う**」ためだということです。ただし、この部分の訳は、新しい訳が意識であり、注に直訳「すべての義を満たす」とあります。その訳の方が本来の意味を伝えていると思います。実際、新共同訳が「**正しいことをすべて行う**」、口語訳が「**すべての正しいことを成就する**」となっていました。「正しいこと」とは、直訳にある通り「義」または「正義」です。もちろんそれは、地上の人間の正義ではなく、天の主なる神様の「義」ですが、イエス様の洗礼とは、その「義」を満たすためなのでした。

マタイ福音書は、この「義」を重要視する福音書といえますが、その意味は、その実行を求め、またその実行が最終的に裁きと関連するということです。そ

れは、マタイ福音書に独特の事柄ではありません。『聖書（旧約）』における主なる神様のイスラエル（人間）との関係における大切な、「正義」と「公正」を基とした事柄なのです。

本日の旧約日課は、イザヤ書が「主の僕」という存在について記述している、四つのうちの最初の部分です。「**見よ、私が支える僕**」(42:1)、その「僕」が「主の僕」なのですが、彼の行動の規範が、この「正義」と「公正」です。「公正」を意味する言葉、それは「裁き」とも訳せるのですが、本日の旧約日課、「**彼は諸国民に公正をもたらす**」(42:1)、「**ついには、地に公正を確立する**」(42:2)にあります。また「義」は、正義や正しい行いをも意味するのですが、「**主である私は義をもってあなたを呼び**」(42:6)にあります。

この「主の僕」とは歴史的に誰か、その問いも重要ですが、教会にとって大切なのは、その「主の僕」がどのような使命を持ち、どのような手段でその使命を果たすかということです。そのことは、「**彼は叫ばず、声を上げず、巷にその声を響かせない。傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心の火を消さず、忠実に公正をもたらす**」(42:2-3)、そして、「**目の見えない人の目を開き、捕らわれ人を牢獄から、闇に住む者を獄屋から連れ出すためである**」(42:7)に明記されています。これが「正義」と「公平」を基にした、「主の僕」のあり方なのです。イスラエルという狭い視野で見るとすれば、その方を民族的解放の指導者と捉えても間違いではないのですが、そこに描かれているあり方は、政治的・軍事的解放運動にあるような姿とは随分異なるのです。

「主の僕」は、力を持って戦いに勝利するような方ではなく、もちろん、傷ついた人間を倒す人ではなく、しかし、決して衰えることもなく、忍耐を持って主なる神様の愛の道を示し続ける方にほかなりません。イザヤ書は、その方の出現を「**見よ、先にあったことは実現した。そこで、私は新しいことを告げよう。それが起こる前に、私はあなたがたに聞かせよう**」(42:9)と未来に起こるべきこととして語っているのですが、教会は、その姿をイエス様に見出したと思います。

クリスマスにおいて、わたしたちは、イエス様の誕生を祝いました。イエス様の生まれ方は特別でした。しかし、同時にわたしたちと同じ肉体を持って生まれました。そのイエス様の活動は特別でした。しかし、その特別さとは、圧倒的な力で振る舞うことではなく、他の人々と同じく歩むという中で示されました。その最初の一步が、この洗礼の出来事である、福音書の物語はそう語っています。イエス様は、神殿祭儀という形では救われない人々、救ってもらえない人々と一緒に、洗礼を待つ列に並ばれたのです。その列には、苦しむ人々もおり、また、人を苦しめていた人いたかもしれません（マタイ福音書の描写ではそのような人々を洗礼者ヨハネが拒否していたようですが）。イエス様はその中におられたのです。だからこそこの方を信頼してよいのだ。そして、そのような方であるからこそ、主なる神様が求めている「正義」と「公正」を明確に示すことができるのだ、マタイ福音書にあるイエス様の洗礼の記述は、そのことを示しています。地上の正義のための戦いが続く現代ですが、だからこそ、イエス様の洗礼が示す大切な事柄を心に刻みたいと思います。